書架　片山杜秀 『新冷戦時代の超克「持たざる国」日本の流儀』　新潮新書 2019 年 2 月 20 日刊 740 円+税

2020 年 7 月 12 日 虎長

音楽評論家にして政治思想史研究家である著者による首題は、「2020 年以降に日本がどう生き延びるか」であるが、本書は一市民の生き延び方をも考えさせる。書名中の「超克」は編集者が命名したとのことだが、当然、戦時中の「近代の超克」が意識されている。著者は、「近代の超克」の主役＝近代徹底的「京都学派」に抵抗するブルジョア的「文學界グループ」を評価する。「近代を超える」といいながら、実は暴走し、却って近代を破滅に導くような力があり、その力を減殺しながら自らを延命させることを、文学グループの態度として「超克」と言っているのに過ぎない、と著者は分析する。よって、本書名に「超克」を使うのもよいと考えたという。「生き延びるためには相対主義な見方が必要」というのが、筆者が本書より得た教訓である。

冷戦時代のドイツでは、東側を認めない強硬派のアデナウアーの後、ブラントは東独を認め、デタントを進めた。現「新冷戦」下で、危険すぎて使えない核兵器で発言力を高める冷戦時代の戦略をとっているのは北朝鮮。中国は覇権主義的大国化を目指している。しかし、アデナウアー的な安倍政権の外交よりも、ブラント的なバランス感覚と歴史認識にもとづいた外交をとりもどしていくことが、日本生き残りの課題と著者はいう。この主張に筆者は共感を覚える。相対主義というと、「あれもある、これもある」という成り行き任せ的な態度に結びつきそうだが、著者の具体的立場は、はっきりしている。相対的な見方をしないと、独善的判断でテンションを増大させる危険がある、というのがデタント志向の著者の心配であろう。

安全保障の面では日本の米軍依存は当面変えられないが、アメリカにとり日米安保は以前ほど必要ではない。アメリカが退き、日本が緩衝的中立国としての立ち回りに失敗したら、ロシア、中国に入り込まれる可能性がなきにしもあらず。日本は、場所的存在感に見合った国力を保てないのなら外交で生き残るしかない。アメリカを引き留めながら、軍備に頼らず新冷戦にソフトな対処をしていく、という考え方は説得力がある。「憲法を変えて矛盾をなくし勇ましく行くようにして玉砕ではたまらない。どうにでも解釈できる現憲法は変えない方が安全」との著者の意見も現実的であると思う。

今の日本には富を上手に分け合う組織と仕掛けがなく、アメリカ流の新自由主義べったり、と著者は見る。まず、「成長」幻想を捨て、生産力と社会の安定を保ち、民主主義社会の中でコンセンサスを得る手段を編みだしてゆく必要があり、参加と責任をセットとした民主主義のためには、教育とジャーナリズムが機能しなければならない、という。この指摘は正鵠を射ている。

明治 100 年までの日本は、日本語の媒介する国学的なヨコと、天皇を仰ぐ儒学的なタテの織り合わせでやってきた。江戸時代には、武家政権と宮廷という二本立てだったのが、明治維新で一元化したため、日本を相対的に観察することが難しくなった、との指摘は、「徳川の平和」を評価する筆者の特に共感するところである。明治 150 年に今さら愛国心をあおっても無理だけれども、直近の未来では外圧に恐怖する水戸学の喜劇的反復としての「新冷戦」が一番ありそうだ、との著者の推測は杞憂であってほしい。

小林秀雄は、理屈が通らないのは世界の当たり前という立ち位置で戦時を生きのびた。伊福部昭はアジア的・日本的な音楽を、大東亜共栄圏的に利用されるも、戦後も貫いた。寄る辺なき時代のポストモダンの時代にあって、理性を失わず自分を保ってゆける道は、目の前にある具体的な事物に真摯にこだわることしかない。これが本書の結論であり、本稿冒頭で述べた、一市民としての生き延び方へのガイドラインである。

以上